

1. そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。
2. それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。
3. そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。
4. 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

## 説教

参議院議員選挙が行われていますので、私たちキリスト者は政治とどう向き合うべきか、使徒パウロから学びましょう。パウロはいくつかの書簡で為政者との関わりについて教えています。獄中書簡であるテモテへの手紙第一のこの箇所もその一つです。

「まず初めに、このことを勧めます。」 「まず初めに」の直訳は「すべての初めに」で、これから話すことがどんなに大切なことであるかを前置きします。そして、こう勧めるのです。「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」 (1)

ここで、パウロは「すべての人」のために祈るよう勧めます。そして、その「すべての人」の代表として「王とすべての高い地位にある人たち」を挙げています。私たちは、自分のことや自分の家族、それから教会の兄弟姉妹といった自分の身近な人のためには祈るのですが、自分と関係ない人のためには祈りません。その縁遠いというか、私たちが関係ないと思って祈らない距離のある人物の代表こそ「王とすべての高い地位にある人たち」といった為政者なのかも知れません。それで、パウロは為政者のために祈るよう勧めます。しかも、祈るだけでなく、彼らのために「願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい」と言うのです。

この「王」とパウロが言う時、必ずしも良い政治を行う王ばかりを意味しているわけではありません。イエスさまを苦しめたヘロデ王や、パウロを迫害して死刑にするローマ帝国の皇帝をも含みます。実際パウロは、悪政の結果として投獄され獄中でこの書簡を書いているのですが、悪い王のことも念頭に置いて「王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい」と勧めるのでした。

理由は、「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて神によって立てられたもの」だからです (ローマ 13:1)。国家というものは神が造ったものではなく人間が造ったものです。ですから、元々は必要ないものなのですが、人間には罪があるので、「人間の墮落を抑止するため」に、神は国家という秩序を正当なものとして認めました。

カルヴァンは、為政者を「神からの権力を授与され、神的権威を与えられていて、全く神の役目を代行し、ある意味で神の代官」と理解しました。このことは教会を迫害する極悪非道な統治者の場合も同じで、その「人間たちを見るべきではなく、或いは、彼らが目下義務を果たしていないのではないかを見るべきではなく、神が確立していたもう秩序に注目すべきなのである」と考えます。「私がこの真理の敵ども、福音が滅び、それと共に我らの主イエス・キリストへの思いも消えてしまえと願っているような人の為にも祈れとは一体何のことか。残酷にも信仰者達を殺している者たちの為にも祈れと言うのか。それはまるで神の教会に死滅をもたらす疫病を下したまえと、神に祈れと言うようなものではないか。しかし、聖パウロは、すべての公権力の為にも祈れと言う場合、祈る者はそう

いうことを見なくても良いと言明している。なぜか。我々は人間を見るべきではなく、或いは彼らが目下義務を果たしていないのではないかを見るべきではなく、神が確立していたもう秩序に注目すべきなのである。それは人間たちの邪悪さによっても損なわれず、少なくとも全面的には拭い去られていないで、何かが残存するのである。…何かしら一定の善の痕跡が残るに違いない。」この解釈からすると、使徒パウロが「すべての公権力の為に祈れと言う場合」、為政者の善し悪しにかかわらず、「神が確立していたもう秩序に注目」してそうせよと勧めていることとなります。

為政者がどのような政治をする責任があるかについて、カルヴァンは「十戒の二枚の板全体にわたるもの」、すなわち神と人を愛することと考えます。それは (1) 神に栄光を帰することと (2) 人類の福祉の正しい増進に仕えることの二つです。前者に関して言えば、それは要するに為政者が国民に偶像崇拜を強要しない政治をすることです。後者に関して言えば、「公共の安寧と静穏とを維持」する政治をすることです。つまり、「正義を行い、窮迫し、困窮したものを解放し、貧しいもの、乏しいものを虐げるものの手から救い出」す為に、統治者は暴力を抑制し、社会の平穏を乱す悪人や犯罪人を厳しく罰します。そして、この為には剣を用いる権利が為政者にはあり、その論理の延長として外敵を退治する正当な戦争もあり得ると考えました。

それでは、もし為政者が暴君と化し、手のつけられぬ圧政を民に加えたら、どうすべきでしょうか。カルヴァンはこれを神の呪いのしるし、怒りの現れとして理解します。それでその際には、自分の罪を悔い改め、神に助けを求めよと教えます。「まず第一に己れ自身の罪過をこれによって思い起こさねばならない。即ち、疑いもなく主のそのような鞭によって、我々の罪過は懲らしめられるのである(ダニエル9:7)。これによって、我々の気短が取り押さえられて謙らされるのである。第二に、我々はこのような悪を治療するのは我々のつとめではないのを心に思い浮かべよう。ただ『王の心と王権の変更とを御手のうちに収め給う』主なる神の御助けを(箴言21:1) 祈り求めることだけが残されているのである。」カルヴァンは、君主制を疑問視し、国民の最良の人々による政治が最善と考えました。それで、これを選挙する責任を人々が軽く見るあまり、汚職等で「神をないがしろにして勝手気ままな連中を立てるなら、これこそ良く知られている通り、神の怒りを誘うこと」で、このような理由で圧政が発生するのであり、それ故、圧政は自分たちの冒涇と邪悪が招いた神の罰だと見るのでした。

使徒パウロは極めて大切なこととして私たちに「勧めます」。「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」為政者の人物の善し悪しではなく、神の秩序に注目し、神に感謝しながら、為政者のために祈らなければなりません。「それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」(2)「敬虔に、また、威厳をもって」の直訳は「あらゆる敬虔さと正直さ(崇敬、品位、まじめ)の中を」で、要するに「きよく、正しく」という意味です。

「平安で静かな一生を過ごす」は、「静かで落ち着いて穏やかに生きる」ことを意味します。神の秩序の中で生かされていることに感謝して平安に生活するのです。

そして、「そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれること」なのだと言います(3)。「喜ばれること」と訳されているのは「受け入れられる、気に入られる」を意味する表現で、どんな政治状況にあっても神に感謝しながら(たとえ悪くても)為政者のために祈ることは、「良いこと」であり、同時に「神に喜ばれること」なのです。

しかし、だからといって、為政者がどんなに悪政をしていてもそれを見て見ぬふりをしていこうというわけではありません。喜んで悪政を耐えて沈黙しているとパウロはここで言っているわけではありません。パウロは神のことを「私たちの救い主である神」と表現します。すなわち、神が「救い主」である故に希望があるのです。それで、こう続けます。「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」(4) 1節で見た

ように、もともと為政者は私たちがとりなし祈る最も縁遠い「すべての人」のうち最後の人物と言うべき存在でした。そんな人たちのために祈ることは、まさしく「すべての人」のために祈るに等しいことです。でも、パウロがそんな人たちのためにも祈れとここで勧める理由は、神がどんなに罪深い者をも滅びから救い出してくださる「私たちの救い主」であり、その「救い主」である神ご自身が「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられる」からです。

だから、私たちは為政者のためにも祈るべきです。為政者が神と人を愛する政治をなすよう祈らなければなりません。そして、祈りつつ、為政者に教えるべきです。十戒の二枚の板に刻まれた永遠の神のみこころを実現するよう教えるべきです。為政者のため祈るよう勧めたパウロ自身もその通り実践して、自分を投獄した為政者のために祈り、最後はローマの皇帝の前でもキリストを証しして真理を知らせました。

今、日本は、原発を再稼働させて不法な戦争を始めようとしている悪政下にあります。この国の為政者が神と人を愛する政治をなすよう為政者のために祈り、神と人を愛する政治をなすようあらゆる手段で為政者に教えて、「すべての人」に真理を宣べ伝えて、神の栄光をあらわしましょう。